

## 161. 昭和63年度滋賀県下における発掘調査の紹介 その1

今年度も県下では、多くの発掘調査が実施され、貴重な成果を上げています。

ここに、「昭和63年度上半期における発掘調査の成果報告」と題しまして、去る昭和63年9月10日(土)に滋賀県埋蔵文化財センターにて行なわれましたスライド発表を紹介いたします。

今後の参考として御活用いただければ幸いです。尚、御協力いただきました方々におきましては、この紙面をもってお礼申し上げます。

### 1. 古墳の中から平底の土器等出土 大津市滋賀里 太鼓塚遺跡

大津市教育委員会では、一般国道161号(西大津バイパス)建設に先立ち、滋賀里一丁目、高砂町に広がる太鼓塚古墳群の発掘調査を進めている。過去2年間の調査で、縄文時代から江戸時代にかけての遺物・遺構を検出しており、今後、太鼓塚遺跡と改名すべきであろう。

今年度の調査では、弥生時代後期の溝・土壇、古墳時代後期の横穴式石室等7基、奈良時代の落ち込み等とともに、各時期の多量の遺物を検出した。ここでは、古墳時代について紹介する。当遺跡では、これまでに31基の古墳が発掘調査によって明らかになっている。この31基の中には、羨道に対して玄室が横長に取りつくものや、玄室平面プランが正方形のもの、一つの墳丘内に2つの石室を築くもの、あるいは一人埋葬用の小石室等も含まれている。また、半数以上の石室内からは、ミニチュア炊飯具セットが一石室一セット確認されている。ほとんどの石室は、天井石が後世に持ち去られており、盗掘を受けているものも少なくないが、なかには、石室壁面の持ち送りの状態や、当時の埋葬状態をそのまま保っているもの等もみられる。

先にも述べたように、今年度の調査では、新たに7基の古墳を検出した。北から仮に1号墳として、順次説明していく。1号墳は、次に紹介する2号墳の周溝

内につくられた小石室で、長さ1.3m、幅0.7m、高さ0.7mを測る。壁面は30~50cm大の石で積み上げられており、床面には、10cm大の石が敷かれている。遺物は出土しなかった。おそらく子供の墓であろう。2号墳は、羨道に対して玄室が横長に取りつく両袖式のもので、羨道の長さ6.0m、幅1.4m、高さ1.7m、玄室の長さ3.2m、幅3.6m、高さ1.7mを測る。羨道部入口部分には、20~30cm大の石を積み上げ閉塞石としている。玄室内からは、奥壁に対して右側の空間に、多量の土器が置かれていた。土師器の甕1点以外は、須恵器の杯・高杯・壺・甕・器台等である。この他の遺物としては、鉄釘、ガラス玉等が出土している。また、玄室床面には赤色をした土がまかれている。3号墳は、羨道の長さ3.5m、幅1.1m、高さ1.4m、玄室の長さ2.4m、幅1.4m、高さ1.2mを測る両袖式のものである。奥壁に対して左の空間に敷石が施されている。玄室内からは、7世紀前半の土器が出土している。4号墳は、羨道の長さ4.5m、幅1.1m、高さ1.5m、玄室の長さ2.5m、幅1.9m、高さ1.5mを測る両袖式の石室である。3号墳同様、奥壁に対して左側の空間に敷石が施されている。玄室内からは、須恵器の杯、短頸壺、甕、鉄釘等が出土している。また、掘形内からも、土器の破片の他に、金環や鉄矛?等が出土している。5号墳は、羨道の長さ2.2m、幅1.2m、高さ0.9m、玄室の長さ2.9m、幅2.85m、高さ1.8mを測り、玄室平面プランがほとんど正方形に近い両袖式のものである。羨道部の一部及び玄室床面全体には、敷石が施さ



1号墳と2号墳の関係

れている。奥壁に沿って、須恵器の杯・高杯・壺・甕・提瓶・横瓶・器台等が、また玄室入口部でミニチュア炊飯具セットが出土している。他に金環、鉄斧・鉄釘、鏝等も出土している。6号墳は、羨道の長さ1.8m、幅0.9m、高さ0.9m、玄室の長さ3.2m、幅2.1m高さ1.3mを測る片袖式の石室である。羨道部には閉塞石が遺っていた。玄室内からは、須恵器の壺、土師器の甕、鉄釘等が出土している。遺物の状態から、2棺納められていたと考えられる。7号墳は、羨道の長さ1.3m、幅0.9m、高さ0.5m、玄室の長さ3.3m、幅2.1m、高さ0.8mを測る片袖式の石室である。石室の遺存状態は非常に悪かったが、玄室内の遺物は非常に良好な状態で出土した。奥壁右隅に、完形の須恵器の壺5個体と土師器の壺・甕各1個体がまとまって出土した。須恵器の壺の中には、当時の土器には非常に珍しい、とっくり形をした平底の壺もある。入口付近では、焼成されていないミニチュア炊飯具セットが置かれていた。奥壁に対して左側の空間には、鉄釘が出土しており、その出土状況からすでに失われている木棺の構造を復元することができる。

以上、今年度の調査の概要を述べてきたが、今後、出土遺物の詳細な観察や、各石室の構造等を検討することにより、さらに当遺跡の歴史的意義を考えていきたい。(大津市教育委員会 田中 久雄)

## 2. 唐橋遺跡の調査

大津市瀬田 唐橋遺跡

唐橋遺跡の性格は従来明らかではなかったが、昭和62年度に実施した潜水試掘調査の結果、石群を伴う何らかの遺構の存在することが判明したため、昭和63年度に発掘調査を実施することになった。調査は450㎡について矢板囲いによる陸化調査を、950㎡について潜水発掘調査を実施することとした。潜水発掘調査を実施することとしたのは、対象地が瀬田川でも最も川幅の狭い処である上、船舶の往来が激しいため、全体を陸化するのには不可能なためである。

陸化調査の結果、木材と大量の石からなる橋脚を支えるための基礎構造物と考えられる遺構が検出された。その構造および推定される構築順序は次の通りである。

まず川底を整地した後流れに平行して径20cm前後の丸太材を3本沈める。この上に径20~30cmの丸太材を11本直行させて並べる。この全体の平面形は楕円形を呈する。(図-3)この丸太材の上に径3~5cmの棒材を2~3層敷きつめる。この基礎の上に直接橋脚を支える台材を幅40~50cm、厚さ40~45cm、長さ500~600cmのヒノキ材を扁平な六角形に組んだ後乗せる。(橋脚の乗る部分には径20cm、深さ5~10cmの円形の穴があげられている。(図-1)この後、全体を大量の山石も

しくは割石で固定する。(石の量は検出時約80㎡を測った。)さらに台材の内側には、石の移動を防ぐため粘土を充填し固める。また流心下流側には杭を8本打ち、洗掘による崩壊を防止している。また、これと同じ構造の遺構が水中調査部でも一基検出されている。これらの遺構から考えられる橋の規模は、梁間約7m、幅員7~9m、橋脚間約15mという非常に巨大な橋となる。



図-1 基礎材および台材検出状況

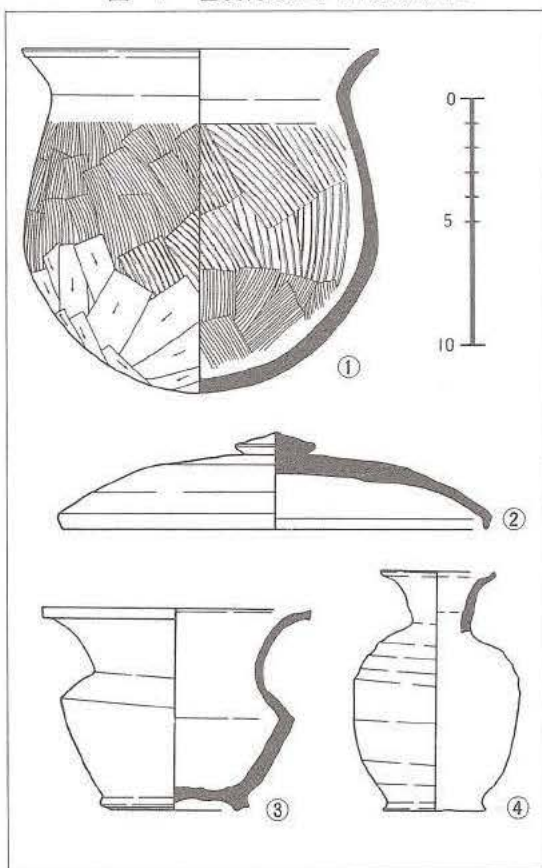


図-2 橋から出土した土器の一部

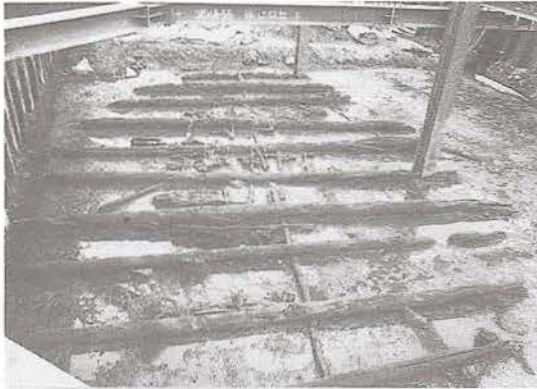


図-3 基礎材検出状況

また、橋脚基礎の石群中およびその周辺から種々の遺物が多量に出土している。①は基礎材直下より出土したものである。②、③は台材の周辺から、④は台材を覆う石群中から出土したものである。この他に「和銅開珎」をはじめとする古銭、斧、釘、刀等の金属器も多く出土している。

この遺構の創建年代は、遺物の出土状況から見れば、7世紀中頃に求められる。また木材について実施した年輪年代測定では、548年、607年という年代が得られており、両者を合わせ考えれば、この橋は少なくとも7世紀代には建てられていたと考えられる。まさに史上名高い「勢多大橋」そのものの遺構と言えよう。また遺物間の年代幅は、橋の架け換え年代を示すものと解することも可能であろう。

現在、水中部の発掘調査を継続中である。

(勸励賀県文化財保護協会 大沼 芳幸)

### 3. 木部遺跡の発掘調査

中主町木部 木部遺跡

木部遺跡は、野洲郡中主町大字木部に所在する弥生時代から中生にかけての複合遺跡である。今回の発掘調査は、県道野洲中主線の道路敷設に先立つもので調査対象面積は800㎡におよぶ。

調査地は、木部の微高地（東西約250m、南北約1km）の北西部に位置する。遺跡の中央には横穴式石室の石材を露呈する木部古墳（6世紀前半の円墳か）と南側には八夫遺跡、虫生遺跡など弥生時代の遺跡が隣接する。

検出した上層遺構は、弥生時代中期の溝を共有する方形周溝墓4基、弥生時代末から古墳時代前期の竪穴住宅跡4棟、奈良時代の異方位条里に伴う溝2条、7世紀から12世紀の掘立柱建物の柱穴、井戸、土塋等である。正確な年代は不詳だが（平安時代か）、鳥居と思われる遺構を検出した。直径50cmの柱2本を石で取り囲むように地業が施されていた。柱間は1.8m、樹

種は栗の木である。当該地の小字名が天神・天神前と称し、鳥居とするにふさわしく、木部の農耕神として天神を祭った鳥居跡ではないかと思われる。

下層遺構は、弥生時代前期の水田跡である。検出した水田遺構は、表土下約1.3m、標高85.7m。水田の一区画の面積が確認できるもの7面とこれに関連する水路3条である。

木部遺跡は、南から北へ傾斜する地形になっているため、水田跡も少なからず制約を受けたと思われる。南側の水田畦畔は、幅20cm、高さ10cmの蒲鉾形を呈する。3.5m×6mの長方形で水路（幅80cm、深さ20cm）に沿って、それぞれの水田区画に水口（副20cm）が切られていた。一方、北側の水田跡は、傾斜がきつくなるためにひと回り小さな水田区画となっている。

水田耕土は、灰色極細砂のシルト層で厚み10cm余りである。この耕土より出土した土器片を年代判定の資料とした。

(中主町教育委員会 徳網 克己)



鳥居遺構

### 4. 今津町妙見山古墳群

今津町福岡 妙見山古墳群

妙見山古墳群は、平野内に位置する独立丘陵である妙見山に多数点在する古墳群である。

61年度以前の調査により、古墳6基、方形台状墓4基が検出されている。

62年度には、古墳一基（B-8号墳）の試掘調査をおこない墳丘の規模と周濠の有無を確認した。その結果、古墳は一辺約15m、高さ約1.5mであり、深さ0.1～0.2mの周濠を検出した。墳丘は丘陵の西側緩斜面にある。

また周濠からは家形埴輪、水鳥形埴輪が出土した。水鳥形埴輪は、ほぼ完形のものである。

63年度は、本調査をおこなった。調査は墳頂部の主体部検出作業を中心とし、墳頂部を徐々に掘下げたところ、3ヶ所の主体部を検出した。



B-8号墳

左←第3主体部 中央第1主体部 右→第2主体部

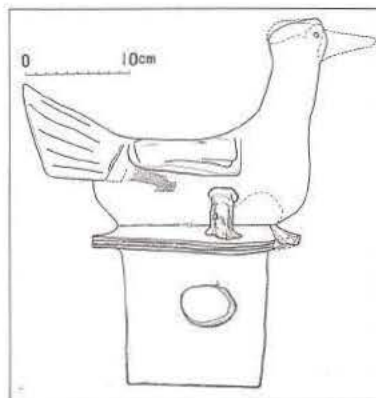


B-8号墳

3ヵ所の主体部のうち最も古い第1主体部は、墳頂部中央にあり、長軸は推定5mを測るが、第2、第3主体部により、墓壇の両側が削られており、中心部の割竹型木棺の底部が残っているのみである。棺床直上から鉄鍔1点が出土している。

第2主体部は、長軸約6m、幅約2m、深さ0.6mの墓壇をもち、中央部には、長軸4.2mの割竹型木棺の底部の痕跡が残る。棺床直上からヤリガンナ、鉄斧薄板状の鉄片が出土している。

第3主体部は、長軸約5.3m、短軸約1.9m、深さ0.6mの墓壇をもち、中央部には長軸3.9mの「木口板を有する割竹型木棺」の痕跡が残っている。遺物は



水鳥型埴輪

出土していない。  
また墳丘盛土は、築造時の基盤土であった黒褐色土(クロボク土)であり、斜面下側では約0.8m盛上げているが、上側では0.2m程度しか盛上げていない。

以上2年度に渡る調査の結果、妙見山B-8号墳の年代は年代を決定する資料の少なから、狭い範囲に限定しにくい。およそ5世紀後半から6世紀前半のものと推定するに留めたい。

(財)滋賀県文化財保護協会 稲垣 正宏)

#### 62年度報告書案内

リストNo	報告書名	領価円	送料円
131	唐橋遺跡	660	200
140	文化財調査出土遺物仮収納保管業務	1,320	250
141	石田三宅遺跡試掘調査概要	180	200
142	一般国道一号関係 南郷遺跡	1,820	250
143	県営かんがい排水事業関連報告書V	2,200	250
144	紀要 第1号	1,200	250
145	北陸自動車道関連X 長浜市国友遺跡	4,700	350
146	金森東遺跡	250	200
147	一県道西明寺水口線一 蓮台遺跡	300	200
148	草津川改修事業に伴う発掘調査概報3	950	250
154	一宇曾川災害復旧助成事業一 肥田城遺跡	4,100	300
155	一県道片岡栗東線一 芦浦遺跡II	800	250
157	ほ場整備関係遺跡(XV-4) 半田・西ノ前・梅ノ木遺跡、山田港遺跡	800	300
158	ほ場整備関係遺跡(XV-2) 四十九院遺跡 下之郷遺跡	2,200	300
160	錦織・南滋賀遺跡発掘調査概要II	1,800	250
161	一般国道8号(長浜バイパス)関連遺跡V	3,900	350
162	敏満寺遺跡一名神多賀S・A上り線~	2,600	300
163	ほ場整備関係遺跡(XV-3) 蒲生町堂田・市子遺跡	2,300	300

《申し込み先》 〒520-21

大津市瀬田南大萱町1732-2

(財)滋賀県文化財保護協会

※現金書留もしくは郵便振替(口座 京都2-13923)